

実践報告

人称がひろく表現の可能性

—日本文学科での授業実践より—

Expression Possibilities Created by Personal Pronouns

—From the Classroom Practice of the Faculty of Literature—

碓井 雄一

Yuchi USUI

キーワード：一人称 書き換え 女性性 男性性

(はじめに)

私が担当する「日本文学演習5」は、日本文学科の原則として二年次生が履修する選択科目である。「5」は近・現代文学の領域を意味する。学生にとって、入学年度の必修科目「日本文学基礎演習」での学び、原稿用紙の使い方・レポートの書き方といった初歩段階からの学びや口頭発表の仕方、レジュメ作成法、等々、通年に亘る文字通り基礎からの学びを踏まえ、三年次から始まる演習(いわゆる「ゼミ」)における、より専門的な学びに向けての橋渡しとも言うべき科目であると私は捉えている(消極的な意味ではなく、積極的な意味で私はそう捉えている)。半期、かつ履修者の最多人数が一五名に制限されており、教員・生徒間の心理的距離もよい意味で近く、凝縮度の高い授業運営が可能である。

学科自体の特性であり、必然的に当授業においても中学校高等学校教員志望の学生、あるいは教員免許取得に向けて努力を重ねる学生が多い。その真摯な学びの姿勢に感銘を受ける場合も屢々である。一方、痛切に感じるものの一つは、文学作品を「読む」という行為に対する無自覚である。たしかに毎期、読書量とい

う面から見ると感心させられる学生は存在する。ところが対話を重ねるうちに、その読書態度が自己完結的であることを知る場合が多いのである。端的に言ってしまうと、「自分の好み」で、その作品が「面白い」、「つまらない」、以上なのである。テキストとの対話が少ないのだ。

私がおそれることは、如上の学生が中学校高等学校等の教員になった場合、ゆたかな読書指導が可能であるのか、ということである。自己完結的な読書態度に対峙するのは批評的な読書態度である。その読書態度を、教員志望の学生ばかりでなく全履修学生に定着させて貰いたい。私は切実に希う。本授業のシラバス中「授業の到達目標」に、私は毎期必ず「感想から分析へ」という言葉を明記している。そのような読書態度への志向を踏まえた上で、教員志望者の場合で言うとしたら、例えば「高等学校学習指導要領」(文部科学省、平21・3)が求める「文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりすること」(科目「現代文B」中「2 内容」より)を旨とする授業運営が可能になるだろう。「要領」が要請しているところを、先ずは学生が自身に厳しく課さなければならぬ。

では、「文学作品を批評的に読む」とはどのような営みなのであろうか。半期という限られた時間内で、如上の読書態度を育むにはどのような授業運営が理想的なのだろう。

一つの試みとして、私は文学作品における人称に着目している。殊に一人称の使い分けである。一人称の使い分けという行為は、言うまでもないが、日常生活において私たちが普通に行っている行為である。この行為を方法として意識的に用い、二つの文学作品の書き換え（語り直し）の課題提出を求めるのである。その際、学生各自は、テキストとの対話を要求され批評的な作品世界の捉え直しに向かわざるを得ない。受けとめ直し、主体的にテキスト生成の現場に参加するのだ。再構築に向けてテキストを生きた、という言い方も可能であろう。愉しみかつ創造的な学びが学生各自においてなされるとしたら、私が想定する本実践の目標は達成される。そして、その過程を踏まえた教育効果として発展的に私が期待するのは、

① 「何が語られているか」という受け取りではなく（この受け取りにとどまるのが、私のいわゆる「自己完結的な読書態度」である）、「如何に語られているか」を問い続けるということ。言い換えれば、「語り手」の存在に絶えず意識を向け、その存在を前景化できるようにすること。

② 女性性（女性的／男性性（男性的））という、ある社会において固定化されたコード自体を、批判的に再検討し得る主体を築く契機となること。

といった点であろうか。今回報告・紹介するのは、平成二八年度後期における実践で提出された課題である。

※

本実践への導入として、私は自身の文例を二篇紹介することになっている。

昭和文学史を語る上で欠かすことのできない存在として、林富士馬という詩人・評論家がいます。林の晩年の数年間、私は親密に交際する僥倖に恵まれた。

「同人誌の神様」なども評された林の最後の同人誌が、林から指名されて私が編集を担当した『ときじく』（全二冊）である。同誌創刊号（ときじくの会、平9・7）の「編集子雑記」から。

●「ときじく」をここに発足せしめ、林先生とお会いしてからの二年間を思うのである。夢中の二年間であった。●私事にわたるが、御紹介下さったのは大久保典夫先生。ぼくが伊東静雄研究に志しているということで、林先生の御宅にお連れ下さったのである。平成七年八月五日とその日にちさえ憶えているのに、どのような御話を伺ったのか、殆ど忘れていた。ただ、興奮して「ハヤシフジマは」と連発していたことを思い出す。（大久保先生が囁きかたに聞いていたことを。そういう、具合の悪いことだけを思い出す）。以来二年、月に一度お会いするたびに、「ハヤシフジマ」がぼくの眼前に坐っているのだ。

●ぼくにとつて、林富士馬は先ず「伊東静雄詩碑を尋ぬ」の詩人であった。この詩の哀しさ懐かしさを言うのはぼくだけではない。そして、伊東と三島由紀夫との関係を論じた「小人」と「俗人」の卓抜。近くは「イロニア」連載「懐しい詩人たち」の若々しさ。それらの筆者林富士馬との、ぼくにとつての夢中の二年間とは、例えばそういうことなのだ。

次は『新現実』71（新現実社、平14・1）、「林富士馬追悼号」に寄せた追悼文「先生の御事」からである。

林富士馬先生がお過ぎになった。そのことを、わたくしは、先生とわたくし共の同人誌『ときじく』同人・勝呂陸男さんから聞かされた。大好きな大好きな林先生がお過ぎになった。ほんとうにかなしい。

（中略）

御葬儀の日、先生にお会いした。御心安らかそうにお休みでいらつしやうた。刹那「死んじゃって」という言葉が口を衝きそうになった。わたくしは狼狽したのである。先生の御顔に両手を触れられ、しづかに語りかけられつつ見つめていらつしやる奥様の御姿を拝した。そしてわたくしはようよう、お別れを申し上げた。先生、さようなら。先生、さようなら。

（中略）

そう、林富士馬先生、御ほとけとなりました耀文院富岳独歩居士は、御著と多くの御葉書を、即ち「文学」を、わたくしのためにのこして下さった、何をかなしむことがあろう。

私は意識的に一人称の使い分けを行っている。前者において私が意識したのは林富士馬という存在との交流を得、その上、その林と同人誌を一緒に持つという事態への喜びに満たされた「ぼく」の躍動感を伝え切ることである。そしてそれ以上に、林との紐帯を持ち得た(愛された)「私的な喜び」の表現を私は志したのである。後者は林の逝去という事実と直面してのかなしみ、また追悼文という文章ジャンルから、「公的」とも言うべき心構えを自身に課す「わたくし」の姿態・矜持を表現することに努めた次第である。

黙読指示の後、感想を求める。私の意図は学生のほぼ全員に感得される。前者に対しては「嬉しそう」、後者に対しては「悲しそう」「真面目そう」、以上に集約されるが、先ずはそれで可いのである。問題はここからであろう。ここにどまる限り、「自己完結的な読書態度」からの主体更新を認めることは勿論できない。その初発感想の起点となるものは何か、そこに意識を向けさせなければならぬのである。二つの文例から、自身が何故そのような感想を持ったのか、話し合いの時間を設ける。「批評的な読書態度」に向けての問いを誘導するのである。すると毎期概ね、学生は一人称の違いという一点に気付く(理解する)。以上のように、一人称の使い分けという方法が自身の世界をゆたかに広げ得る、そのことを実感し、知的理解を得ることが重要であると考える。

ここで実践課題に入る。先ず取り上げるのは夏目漱石「吾輩は猫である」(明38)である。「吾輩」という一人称から受ける印象を学生に確認すると、

① 男性的である。

② 居丈高な感じがする。

概ねこの二点に集約される。更に、批評的な人物、冷厳な人物、といった感想が挙げられる場合もある。男性性の際立つ一人称として各自が認識していることは明らかである。余りにも知られた(例えば、先代の千円札にも採用されていた)漱石の肖像とイメージが切り結ばれているとも思われるが、何にせよ、語りの実際として「猫」は自身を男性として定位し、人間に向けて対等の立場を主張しようとしていることは明らかであろう。「吾輩」という一人称を扱って自己語りを始めた「猫」は、以後、自身を「人間社会」に対峙する批判者として定位させてゆく。

例題・次の文章を、「ウチ・アタシ・あたし」等の一人称を使って書き換え

(語り直し) なさい。(課題におけるかなづかいの混用はママ)

吾輩は猫である。名前はまだ無い。(改行) どこで生れたか頼と見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いて居た事文は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあとで聞くとそれは書生といふ人間中で一番癡悪な種族であつたさうだ。此書生といふのは時々我々を捕へて煮て食ふといふ話である。然し其当時は何といふ考もなかつたから別段恐しいとも思はなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフフハハした感じが有つた許りである。

性別を問わず、例題に指定された一人称から学生が想定する主体は、毎期、ほぼ「女子高校生」に限定される。女性性が強く、更に、年齢を限定する力を持つ一人称として捉えられるようだ。稀に「関西(京都)の女性」を想定する学生も現れる。以下に、活き活きと愉しみつつ、現代的な女子高校生を演じる学生(テクストを生きたる語り手)の提出課題を掲げる。

ウチは「猫」かも。名前はまだ無いの……。どこで生まれたかも分かんないの……。何かね、薄暗くてじめじめした所でニャーニャー泣いてたのは覚えてるんだけどね……。ウチはここではじめて人間ってゆーものを見たんだけど後々聞いたらその人間は書生ってゆー人間の中で一番最悪な種族だったんだあ。この書生ってゆーのは時々ウチらを捕まえてたり煮て食べられちゃうってゆーウワサ……。今思えばめっちゃ怖いけどあの頃は何も考えてなかったから何とも思わなかったけどね。ただ何だかわかんないけど彼の掌に載せられてスーって持ち上げられた時何だかフフハハした感じがあつたな。

ウチは猫だよ★名前はまだ無いよ。どこで生まれたかわからないよ。てか薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていたのを憶えてるよ。ウチはここで初めて人間を見たよ。あとで聞くとそれは学生で、メツチャやばいらしい。しかもこの学生は、時々ウチらを捕へて煮て食べるって聞いたよ。その時は何も考えてなかったから、別に怖くなかつたし。でも、彼の手に載せられてスーと持ち上げられた時は、何かフフハハ感じがしたよテヘペロ★

ウチは猫だよ。名前はまだ無いんだけど。どこで生まれたかとか分かんない。何か地味に暗いところでニャンニャンしたのは覚えてるよ。ウチさあここで初めて人間とかいうの見たんだよね。ウケる。しかも、あとで聞いたらそいつ学生とかいって人間の中で鬼ヤバイ奴だったとかガン萎え。この学生とかいうのたまにウチら捕まえて料理して食べるとかいうの。でもそんなときは何も特に考えてなかったから別に恐いとか思わなかったわ。でもさあアイツの掌にのせられてスーってされたときはマジきゅんだったわ。

何れにおいても、話し言葉の直截的な使用（「〜ってゆー」「メッチャ」等）や記号の使用（「★」、間投的な感情の表現（「ウケる。」等）、または特定集団内のみ通用すると思われぬ「テヘペロ」等）によって、逆説的に「社会性の希薄な女子高校生」の姿態を的確に表現している。一例目における「ウチは「猫」かも。」という隲化の文末表現にも注意を向けたい。課題提出後、参加者全員による検討機会是不可欠であるが、以上の三篇は好評であった。感覚的に「上手だ」という感想が多かった訳であるが、私が右のようなところを解説すると、各自が充分に納得したようである。以下、好評だった提出課題を何篇か掲げておく。それぞれ真摯な姿勢での取り組みを見て取ることができる。

あたしは猫だけど、名前なんかないしね。どこで生まれたかなんてわかんないしねえー、つーか、うすっ暗いじめじめしたところでニャーニャー泣いていたのはマジ覚えてるしー。あたしはここでマジ人間つーものをみたしねー。てか、あとで聞いたんだけど、その人間はマジ最低だったらしいねー、つーか、学生って煮て食べるってきいたし、マジそんなこと思っていなかったから怖いし、ありえないし。ケド、彼の掌に載せられたとき、マジ嬉しかったし。

ウチは猫ツス。名前はまだ無いよーん。どこで生れたかまったく見当つきませーん。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いてたのは覚えてます。ウチはここで初めて人間というのを見ちゃいました。しかもあとで聞くとそれは学生という人間の中で一番ど〜うも〜うな種族なんだって。この学生というのは時々ウチ等をつかまえて煮て食べるんだって。だがシカシ、

その時はそんな考えもなかったから別に恐いなんて思っていないし、ただ、彼の掌にのせられてスーと持ち上げられた時はなんだかフワフワした感じがあったのだー。（傍点原文）

ウチは猫。名前はまだない。どこで生まれたかさっぱり分かんない。何か薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いてたってことだけは覚えてる。ウチはここで初めて人間っていうのを見た。しかも、あとから聞いたらそれって学生っていう人間の中で最も性質が悪いやつなんだって。この学生は、時々ウチらを捕えて煮て食べるらしい。だけど、その時はそんなことちっとも考えてなかったから特に恐いとか思わなかった。ただ、彼の手に乗せられてスーって持ち上げられた時、何か知らないけどフワフワってしたんだよね。

女子高校生という主体を設定した場合、その主体が感覚的／告白的な表現を導くこと、一見して明らかである（例えば「し、し。」という連続的な文末表現、等）。一方、原文における、思弁性を装い、簡潔を旨とする断定的な「吾輩」の語りは姿を消してしまっているのである。^{（注）}

最後に掲げておきたいのは、平成二七年度前期に提出されたものである。これを越える「吾輩は猫である」課題の提出を、現時点において私は見ない。

アタシはCat, s !! 名前なんかないしー。どこで生れたかなんて、わかんない、でもなんか、薄暗くてジメジメしたとこで泣いてたってことは覚えてる系、アタシは人間つてのを初めてみた、しかもー後で聞いたんだケド、その時みたヤツは人間のなかで、マジ悪いヤツらしいんだー、何かああアタシ達を、つかまえて（確井注、「Get」のルビ）喰うらしいつう話、前までは別になんともなかったから恐くなかったんだー、でもヤツラの手で上にあげられた時はフワフワした感じだった。マジビビッタンだけど……。

※

次に取り上げるのは太宰治「女生徒」（昭14）である。本作に限らず太宰治はいわゆる「女語り」の巧みさにも定評があり、その点が多く考察の対象になって

来たことも周知であらう。^{後7}

例題・次の文章を、「おいどん・わし・俺・吾輩・拙者」等の一人称を使つて書き換え（語り直し）なさい。（課題におけるかなづかいの混用はママ）

朝は、なんだか、しらじらしい。悲しいことが、たくさんたくさん胸に浮んで、やりきれない。いやだ、いやだ。朝の私は一ばん醜い。両方の脚が、くたくたに疲れて、さうして、もう、何もしたくない。熟睡してゐないせゐかしら。朝は健康だなんて、あれは嘘。朝は灰色。いつもいつも同じ。一ばん虚無だ。朝の寝床の中で、私はいつも厭世的だ。いやになる。いろいろ醜い後悔ばかり、いちどに、どつとかたまつて胸をふさぎ、身悶えしちやふ。朝は、意地悪。

「お父さん」と小さい声で呼んでみる。へんに気恥づかしく、うれしく、起きて、さつさと布団をたたむ。布団を持ち上げるとき、よいしょ、と掛声して、はつと思つた。私は、いままで、自分が、よいしょなんて、げびた言葉を出す女だとは、思つてなかつた。よいしょ、なんて、お婆さんの掛声みたいで、いやらしい。どうして、こんな掛声を発したのだらう。私の中から、どこかに、婆さんがひとつ居るやうで、気持ちがいい。これからは、気をつけよう。ひとの下品な歩き格好を鑿鑿してゐながら、ふと自分も、そんな歩きかたしてゐるのに気がついた時みたいに、すごく、しよげちやつた。

こちらの方が学生にとつて手強いようである。毎期、文末表現について単調な繰返しになつてしまつてゐるものが多く見られる。例えば、「おいどん」を選択した学生の課題がほぼ全文「〜でござす。」になつてしまふ、というような場合である。失敗例二篇のそれぞれ前半部分を掲げる。

朝は、なんだか、しらじらしいでござす。悲しいことが、たくさんたくさん胸に浮んで、やりきれないでござす。いやでござす。いやでござす。朝のおいどんは一ばん醜いでござす。両方の脚が、くたくたに疲れて、さうして、もう、何もしたくないでござす。熟睡してゐないせいでござすか。朝は健康

だなんて、あれは嘘でござす。朝は灰色でござす。いつもいつも同じでござす。一ばん虚無でござす。朝の寝床の中で、おいどんはいつも厭世的でござす。いやになるでござす。いろいろ醜い後悔ばかり、いちどに、どつとかたまつて胸をふさぎ、身悶えしちやふでござす。

朝は、意地悪でござす。

朝は、なんか、白々しいつス。悲しいことが、すつごくすつごく胸に浮んで、やりきれないつス。いやつス。いやつス。朝のオイラは一ばん醜いつス。両方の脚が、くたくたに疲れて、それで、もう、何もしたくないつス。熟睡してないからつスからねえ。朝は健康だなんて、あれは嘘ッパチつス。朝は灰色つス。いつもいつも同じつス。一ばんの虚無つス。朝の寝床の中では、オイラはいつも悲しいつス。いやになるつス。いろいろ醜い後悔ばかり、いちどに、どつとかたまつては胸をふさいで、キツいつス。

朝は、意地悪つス。

「吾輩は猫である」の課題とは逆の事態を想定すればよいのであろうが、男性性の強い一人称が扱はれた場合、繰返し表現や名詞止めの文末表現が極端に減り、一文が端的になり、更に、思弁的な表現になる傾向が指摘できると思う。対社会的意識が強くなるとも言つてもよいのであろうか。ひらがな表記の部分を殊更に漢字表記に改める提出課題も、毎期多く認められる。

朝は、どうも白々しい。悲しいことがどえりやうたくさん胸に浮んでやりきれんわ……。いやじゃいやじゃ。朝のわしは一番醜い。両方の脚が、クタクタにばてとるわ、何もしようない。熟睡できぬせいかのう。朝は健康だなんてありやう嘘つばちだべ。朝はいつも灰色、一番の虚無じゃ。朝の寝床の中で、わしは常に厭世的なのじゃ。全く嫌になるのう……。いろいろ醜い後悔ばかり一氣にどつとかたまつて胸をふさぎ身悶えしちまふ。

朝はひどい。

「お父ちゃん」と小声で呼んでみる。変に気恥づかしい、うれしいは起きてさつさと布団をたたみ持ち上げる時「よいしょ」と掛声してはつと思つた

んだがわしは今まで自分が「よいしょ」なんつーげびた言葉を言い出す男だとは思わなかった。よいしょなんて婆さんの掛声みてーでいやらしい。何故にこんな掛声を発したのだろう。わしの体の中のどこかに婆さんがいる様で気持ち悪い。気をつけんとな。ひとの下品な格好を躰覺していながらふとわしもそんな歩き方してるのに気がついた時みたいにいらいしょげちまった。

朝げは、なんだか、白々しいわい。悲しいことが、ぎょうさんぎょうさん胸に浮んで、やりきれなくてかなわん。おいどんの朝は両の脚が、ポロポロで、もう何もする気もありやあせん！ 熟睡してないせいとか、朝は健康だなんて、あんなん嘘に決まっちゃう！ 朝なんつうもんは灰暗く、いっちゃん虚ろな時間だわ。おいどんはいつも布団の中で世間から目をそらし、ぎょうさん辛い事ばかり考えるもんで身悶えしちゃう。

朝は、意地悪たい。
「おとん」と、ちよいと呼んでみる。変に気恥ずかしゅうて起きてちやっちやと布団をたたむ。「うんしょ」と掛け声をして思う。おいどんは今までうんしょなんてげびた言葉を言う男だとは思いましちよらなかつた。ババアの掛け声みたく下品たい。おいどんの体の中にババアが住んちよるのか気味が悪い。これからは気をつけ人のフリ見て我がフリ直していこうと思いきよげちまった。

以下、全体的に高い評価を得た提出課題を何篇か、それぞれ前半部分を掲げておく。各自の、いわば人稱との格闘の様子が認められて好ましい。

朝は、何やら、白々しいわ。悲しいことが、たくさん胸に浮かんでやりきれないでござす。いやじゃ。朝のおいどんは一ばん醜いわい。両方の脚が、くたくたに疲れて、そうして、もう何もしたくないわ。熟睡してないせいとかも知れん。朝は健康なんて、あれは嘘じゃろ。朝は灰色でござす。いつも変わらぬわ。一ばん虚無でござす。朝の寝床の中で、おいどんはいつも厭世的じゃ。嫌になる。いろいろ醜い後悔ばかり、いちどに、どっとかたまつて胸をふさぎ、身悶えしてしまふわい。

朝は、どういう訳であろうか、白々しいものだ。悲しいことが、非常に多く胸に浮かんでやりきれないのである。嫌である。朝の吾輩はこの上なく醜いのである。両方の脚がこの上なく疲れ、その為、もう、何もしたくない。熟睡してない故であるかも知れぬ。朝は健康などよく耳にするが、それは嘘であろう。朝は灰色である。毎朝変わらぬ。最も虚無である。朝の寝床の中で、吾輩は絶えず厭世的である。嫌になる。色々醜い後悔ばかりが一度に、どっとかたまつて胸をふさぎ、見悶えがする。

朝はなんだか、しらじらしい。悲しいことが、たくさん胸に浮かんでやりきれない。いやだ。朝の俺は一ばん醜い。両方の脚がくたくたに疲れて、それで、もう、何もしたくないのだ。熟睡してないせいとか、朝は健康なんてあれは嘘だ。朝は灰色だ。何も変わらない。一ばん虚無だ。朝の寝床の中で俺はいつも厭世的だ。いやになる。いろいろ醜い後悔ばかりで、一度にどっとかたまつて胸をふさぎ見悶えするのだ。

朝は、なにやら、しらじらしいだが、悲しいことが、たあつくさん胸に浮んで、やりきれん。いやじゃ。いやじゃ。朝のおいどんは一ばん醜いだよ。両方の脚が、くたくたに疲れきって、そうすつと、もう、何もしたくない。熟睡してないせいとか何なのか。朝は健康だなんて、あれは嘘つばちでい。朝は灰色じゃ。いつも同じじゃ。一番虚無じゃ。朝の寝床の中で、おいどんはいつも厭世的だよ。いやんなるの。いろいろ醜い後悔ばかりしとって、いっぺんに、どっとかたまつたもんが胸をふさいで見悶えるわい。

朝は、なんだか、しらじらしいな。悲しいことが、たくさんたくさん胸に浮んでやりきれねえ。嫌で嫌で。朝の俺は一ばん醜い。両方の脚が、くたくたに疲れて、さうしても何もしたくないわ。熟睡してないせいなんか。朝は健康だなんてあれは嘘だ。朝は灰色だ。いつも同じだ。一ばん虚無だ。朝の寝床の中でおいらはいつも厭世的だ。いやになるんだ。いろいろ醜い後悔ばかり、いちどに、どっとかたまつて身悶えしちゃうんだ。

その他、「いやだ。いやだ。」の部分、「嫌で嫌で」、「あーやだやだ」という処

理、このようにすると、繰返し表現の女性性が消えてしまうのではないだろうか。また「嫌なものだ。」という処理もあり、これも適切であると感じる。「朝は健康だなんて、あれは嘘。」の部分、「朝は健康だとは良くいったものだ」、また、前後をつなげて「嘘であり、いつも同じ灰色である。」というも処理も、断定的であり、男性性が際立つ適切なものであろう。「いろいろな醜い後悔ばかり、いちに、どつとかたまつて胸をふさぎ、身悶えしちやふ。」の部分、「いつものへばの後悔ばかり、まとめてドカッと来て胸をふさぎ、遣る瀬なくなり申す。」という語り直しもあつた。柔軟な感性に基づく処理であらう。総じて、繰返し表現・文末の名詞止め、以上のような点に女性性が強調されると捉え、その部分の処理を試みる学生が多いようである。

自覚的・創造的な読者としての自己をつくり上げてゆくこと。テクストとのゆたかな対話を重ねてゆくこと。そして、自身の世界をゆたかに広げる表現方法の一端に触れること。学生各自において本実践がその契機になるのだとしたら、私にとって、それに過ぎる喜びはないのである。

(注1) 昨年、亀井秀雄監修／蓼沼正美「超入門―現代文学理論講座」(筑摩書房、平27・10)を精読する機会を得た。学ぶところ多大であり、今後の本実践に活用させていたきたい視点を多く得た次第である。殊にも芥川龍之介「羅生門」に触れての、「第三講 読むことのダイナミズム」における、

これまでの国語の教室における「羅生門」の読みは、ほとんどが「下人」の立場に一元化されてきてしまいました。実際には老婆の立場に立つて読んでみることも十分可能ですし、あるいは登場人物以外の視点に立つて読んでみることも出来るかもしれません。その意味で「読者」とは、場合によっては作者以上に物語内容を創り出して行く、そういう創造的な読み手であるといううことが出来るのです。(傍点原文)

という主張につき、以後の実践に向けて、私において得難く有益な啓発であったことを明記しておきたい。

(注2) 「人称」に関しては、言語学においては言うまでもなく文学・社会学研究においてもゆたかな研究の蓄積がある。例えば、「ナラトロジーの言語学―表現主体

の多層性」(ひつじ書房、平27・10)をはじめ、管見の限り最新のものとして「文学の「人称」と言語学の「人称」」(全国大学国語国文学会「文学・語学」219、平29・6)等の、福沢将樹の精緻鋭利な一連の論究、安藤宏「私」をつくる―近代小説の試み」(岩波書店、平27・11)、等、精力的な為事から得る学恩は私において測り知れない程に大きい。両氏の為事をはじめ、従来の研究から学び得たところを活かし切れている実践ではないことを恥入るばかりであるが、敢えて掲げ、謝意を表しておきたい。

(注3) 大正三年生。昭和七年佐藤春夫に入門。太宰治に兄事する。昭和一四年「誕生日」(私家版)刊。伊東静雄の知遇を得、以後親密に交際する。また富士正晴と識る。以後、「千歳の杖」(まほろば発行所、昭19)、「夕映え」(私家版、昭40)、「十薬」(皆美社、平3)等。評論集成として「林富士馬評論文学全集」(勉誠社、平7)。「まほろば」(昭17)、「曼荼羅」(昭19)、「光耀」(昭21)、「新現実」(昭23)等の同人誌を主宰、庄野潤三や三島由紀夫等を見出す。檀一雄・五味康祐・伊藤桂一等と親密に交際する。長期に亘る「文学界」誌「同人雑誌評」の担当者(昭33〜55)、その業績により菊池寛賞を受賞(昭54)。平成一一年死去。

(注4) 「人称の使い分け」という精神性について考える時、安藤(注2)書における書名、または章題「演技する「私」」(第一章)「私」が「私」をつくる」(第四章)等の視座設定とそこからの考察は有益である。

(注5) 藤尾健剛「写生文の二つのタイプ―写生文における「俳句趣味」」(大東文化大学紀要(人文科学編)55(平29・3))は、明治期さかに行われた「写生文」を「散策記・紀行文型」「逗留記型」の二類に分ち、「写生文」概念の再検討を迫り示唆に富む。「吾輩は猫である」の語りについては「逗留記型に固有な、語り手と他の人物とを隔てる距離は、「猫」の場合、批評を可能にする条件として機能している」と指摘している。その「条件」として、「猫」自身が扱んだ「吾輩」という一人称も与っているのではないかと一点を私なりに付け加えたい。

(注6) このような現象について考える時、鈴木広光「自分の恋を語り、書くことをめぐる闘争」(高岡尚子編「恋をする、とはどういうことか?―ジェンダーから考える」とばと文学」ひつじ書房、平26・4)における、次の指摘は有益である。長い引用をお許しいただきたい。

1911年11月に雑誌「青鞥」は創刊された。その創刊号における与謝野晶子の「すべて眠りし女今ぞ目覚めて動くなる」、あるいは「一人称にてのみ物書かばや」「そぞろごと」という宣言とともに、女たちは一人称で自らの生を、そして恋を語り始める。晶子の宣言そのものは文語体であったが、「青鞥」の書き手たちは言文一致体など口語文を選択した。だが、先にも述べたように、言文一致体は表面的には中性を装いつつ、本質的には(男性)性を付与された言語であったから、自己の生も恋愛もその枠組みから語られることになってしまふ。(略)このような事態に対して、「青鞥」に集った書き手たちは、既成のジャンルにとらわれない(私)を語る文章(告白)によって、表現主体としての自己を回復し、自己を語る言語の奪還を試みたのであった。

提出された課題文からも「告白体」のゆたかな可能性を見て取ることができる。例えば読点によって延々と続けられる文体は、(告白)の息づかいを活き活きと再現しているかのである。

(注7) 太宰治自身が女性読者から寄託された日記を、「語り直し」という作業を経た上で、「作品」として発表したものが本作であるという事実も周知であろう。そのことを前提として、本作の研究史については井上論一が簡潔に纏めて便宜を得る(安藤宏・神谷忠孝編「太宰治全作品研究事典」勉誠社、平7・11)。それ以後の研究中、本実践の立場から(女語り)「人稱」「語り直し」といった点につき、以下の論考から有益な刺激を受け続けている。掲げて謝意を表しておきたい。藤掛有紀「太宰治研究―(女語り)の力」(『東京女子大学日本文学』98、平14・9)、岡村真由美「『女生徒』を教える―中学校における現代国語の授業実践報告」(日本女子大学大学院「会誌」22、平15・3)、滝口明祥「ある少女の『自分一人のおしゃべり』が活字になるまで―『有明淑の日記』と太宰治『女生徒』」(『繡』16、平16・3)、内海紀子「テキストにおけるクロスジェンダード・パフォーマンス―太宰治『女生徒』から篠原一「ゴージャス」まで」(日本近代文学会「日本近代文学」71、平16・10)、櫻田俊子「太宰治・女性独白体作品を生んだ時代背景―雑誌と女性読者」(法政大学大学院「日本文学論叢」38、平21・3)、小平麻衣子「太宰治『女生徒』を読む」(日本大学「語文」143、平24・6)、松本和也「主題としての『喪の仕事』―太宰治『女生徒』論」(立教大学日本文学)108、平24・7)、千葉一幹「女」は、文学に

なにももたらしたのか―太宰治における言語的異性表趣味と文学の意味」(文藝春秋「文學界」67の2、平25・2)、等。

「吾輩は猫である」『女生徒』の引用・実践使用は、『漱石全集』第一卷(岩波書店、平5・12)、『太宰治全集』第三卷(筑摩書房、平10・6)に拠り、ルビは省略した。なお、参考文献の刊行年表記は元号に統一させていただいた。